Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2015, Vol.24, 189-195

論 文

保健室イメージと学級適応感が養護教諭へのアタッチメント行動に及ぼす影響

島　　義　弘[鹿児島大学教育学部（教育心理学）]・永　瀬　由　佳[1]

Attachment behaviors toward a school nurse: Effects of students' adaptation to their class and their image of school nurse's office

SHIMA Yoshihiro・ NAGASE Yuka

キーワード：養護教諭、保健室イメージ、学級適応感、アタッチメント行動

問題と目的

子どもは主要な養育者との間にアタッチメントを形成し、アタッチメント関係を基盤として社会生活を営む（Bowlby，1969）。乳幼児期には、母親を拠点として外界を探索し（安全基地行動）、環境探索において不安や恐怖、疲労を感じると母親の元へ戻ってくる（安全な避難場所行動）。こうした一連のアタッチメント行動を繰り返す中で、子どもは「アタッチメント対象は自分を守ってくれる」と信じて、安心して離れることができるようになっていく。人は「自分が守ってもらえる」という確信に支えられることで、安心して環境と関わることができるのである（山口、2009）。

児童期以降、アタッチメント対象は母親を中心とした家族から、友人など家族以外の人物に移行していく（Hazan & Zeifman，1994）。親元を離れ、一日の大半を学校で過ごす児童生徒にとって、学校の中でアタッチメント対象に類似した機能を果たす人物の存在が、安定した学校生活を営む上で重要になる。多くの児童生徒にとっては学級担任や教科担任の先生、クラスメートなどがこの役割を担うが（Hazan & Zeifman，1994; Howes, Hamilton, & Philipsen，1998）、こうした人たちとの関係をうまく築くことができずに様々な不適応を抱えてしまう児童生徒も少なくない（小林・仲田、1997）。このような児童生徒にとって、自分のクラスとは別に存在する図書室や司書教諭、あるいは保健室や養護教諭といった存在が、一時的な避難場所として、また必要なときに助けを求めることのできる心の拠り所として、重要になってくる。本研究では特に保健室と養護教諭を取り上げ、児童生徒が持つ保健室イメージと学級適応感が養護教諭に対するアタッチメント行動に与える影響を検討する。

保健室と養護教諭

保健室は怪我や病気の応急処置、健康診断等を行うために学校に設置されたものであるが、いじめや不登校等、メンタルヘルス上の問題を抱える児童生徒の利用が増加し、こうした児童生徒へのカウンセリングを行う場としての機能も求められるようになった（文部科学省、1997）。これに伴い、保健室を拠点として活動する養護教諭の職務として、児童生徒の心身両面にアプローチするヘルスカウンセリングに対する要請も高まった。現在では、心の問題を含む現代的な健康課題の解決において、養護教諭は学校内外のコーディネーター的役割も求められている（文部科学省、2008）。

学校教育には多くの課題があるが、メンタルヘルス上の問題が関わる課題の１つに不登校がある。不登校は「心理的、情緒的、身体的及びあるいは社会的要因・背景により登校しないあるいはしたくてもできない状況にあるために年間30日以上欠席したもの（病気や経済的な理由によるものを除く）」であり、平成24年度の不登校児童生徒数は小学生21,243人（0.31％）、中学生91,446人

[1] 元　鹿児島大学教育学部

(2.56%)、高校生57,664人（1.72%）であった（文部科学省、2013)。また、不登校ではないものの「常時保健室にいるか、特定の授業には出席できても、学校にいる間は主として保健室にいる状態」である保健室登校も小学生の0.16%、中学生の0.41%、高校生の0.16%に上っている（日本学校保健会、2013)。このうち、不登校のきっかけと考えられる主たる原因は小中学生とも「不安など情緒的混乱」であることから、児童生徒の不安や混乱を和らげるような人や場所が存在することが不登校をはじめとする児童生徒のメンタルヘルス上の問題の予防、軽減につながると考えられる。

学校適応と「心の居場所」

不登校や保健室登校の児童生徒数は各種統計資料として把握可能だが、学校に登校し、教室に入っている児童・生徒の中にも学校適応の良くない者は多い（斎藤・守谷・社浦・山内、2008)。これらの児童生徒は「学校に居場所がない」と感じていることが指摘されており（斎藤他、2008)、学校における「心の居場所」が学校適応に重要な役割を果たすと言える。

児童生徒にとって学校生活の中心となるのは学級であるが、学級にうまく適応できない児童生徒は学級外に「心の居場所」を持つことが必要になる。小学５・６年生を対象にした豊田・吉田（2012）の研究では、図書室や体育館、保健室等が好きな場所として挙げられることが示されており、これらの場所やそこに存在する人が児童生徒のメンタルヘルスを支える重要な役割を担っていることが推察される。

仮説

学級内で様々なストレスを抱えたり、情緒的混乱に陥ったりしたときに、「心の居場所」やその場所に存在する人に助けを求めることができれば、児童生徒は再び落ち着きを取り戻し、学級に戻ることができるだろう。このような児童生徒の心身の動きはアタッチメント対象に対するアタッチメント行動（安全基地行動、安全な避難場所行動）と類似したものであると考えられる。本研究では児童生徒の心身の健康に重要な役割を果たす保健室と養護教諭に着目して、児童生徒の学校適応を保障するための支援のあり方について考えたい。休み時間などのわずかな時間であっても、保健室という空間で養護教諭と関わる時間は、学級適応に困難を抱える児童生徒にとって情緒的混乱を鎮静化し、学級に戻る意欲を喚起する、重要な時間・空間であると考えられる。また、実際に保健室に行くことはなくとも、「保健室に行けば養護教諭は自分を受け入れてくれる」と期待することができれば、児童生徒は心の健康を維持することができるだろう。

ここまでの議論を踏まえて、以下のように仮説を設定した。

困難が生じたときに助けを求めるには、その対象に対してポジティブなイメージを持っていることが前提となる。したがって、保健室に対してポジティブなイメージを持っている児童生徒は養護教諭に対してアタッチメント行動を取ると考えられる（仮説１)。また、多くの児童生徒にとって学校内でアタッチメント対象と類似の機能を果たす存在として学級担任・教科担任やクラスメートが選択されるが、これらの人物との関係形成が困難な、学級適応が不良な児童生徒は養護教諭等、学級外の人物に助けを求める必要がある。したがって、学級適応が不良であるほど、養護教諭に対してアタッチメント行動を取ると考えられる（仮説２)。

方法

調査対象者

Ａ県内の小学６年生63名（男子28名、女子35名)、中学生111名（男子51名、女子60名)、高校生91名（男子24名、女子67名）を対象に、質問紙調査を行った。

調査内容

1.　保健室イメージ：佐藤・井上・小松代・浅川（2013）が作成した保健室イメージ尺度から、「安堵感」（項目例：「保健室に行くと、元気が出るような気がする」、「保健室に行くと、心がホッとする・安心する気がする」）と「親和性」（項目例：「保健室は、具合の悪くない人にとっては親しみにくい場所だと思う（逆)」、「保健室は、暗い雰囲気

があると思う（逆）」）の２因子のいずれか一方に.60以上の負荷を示した18項目を採用した。「そう思わない＝１」から「とてもそう思う＝４」までの４件法で回答を求めた。

2.　学級適応感：小泉（1995）で作成された教育環境適応尺度のうち、「対教師関係」（項目例：「先生は、自分たちの気もちをわかろうとしていると感じることがありますか」、「先生とは、できるだけしゃべりたくないと思うことがありますか（逆）」）、「級友関係（正）」（項目例：「クラスの人と話していて、楽しいと感じることがありますか」、「クラスの中には、いい友だちがいっぱいいてよかったと思うことがありますか」）、「級友関係（負）」（項目例：「クラスの人と、あまり話したくないと思うことがありますか」、「自分は、クラスの人からあまりよく思われていないと感じることがありますか」）の３因子10項目を、表記を一部改変して使用した。「めったにない＝１」から「よくある＝４」までの４件法で回答を求めた。

3.　アタッチメント行動：WHOTOテスト(Fraley & Davis, 1997)を参考に、「安全基地行動」（項目例：「養護教諭には、自分が混乱したり、落ち込んだりした時に一緒にいて欲しいと思う」）と「安全な避難場所行動」（項目例：「養護教諭をいつも頼りにしている」）に該当する４項目からなる尺度を作成した。「そう思わない＝１」から「とてもそう思う＝５」までの５件法で回答を求めた。なお、小中学生に対しては「わからない＝０」を付け加えたが、「０」と回答したものは分析から除外した。

結果

校種別の記述統計量

各校種の調査対象者数の制約上、校種別に因子分析を行うことは困難であるため、保健室イメージは「安堵感」と「親和性」の２因子、学級適応感は「対教師関係」、「級友関係（正）」、「級友関係（負）」の３因子、アタッチメント行動は１因子を仮定し、校種別に平均値と標準偏差、信頼性係数（α）を算出し、Table　1に示した。また、各因子の相関係数はTable　2に示した。α係数はおおむね満足のいく値であったが、小学生の「級友関係（正）」と「級友関係（負）」、高校生の「対教師関係」はα係数が低く、本研究で仮定した因子構造とは異なる可能性が高いため、以下の分析からは除外した。

保健室イメージと学級適応感がアタッチメント行動に与える影響

校種別に、アタッチメント行動を目的変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した。説明変数は、調査対象者の性別と保健室イメージ（「安堵感」、「親和性」）、学級適応感（「対教師関係」、「級友関係（正）」、「級友関係（負）」）、および保健室イメージと学級適応感の交互作用であった。結果はTable　3に示した。以下に校種別の分析結果を記載する。

小学生　分析対象者は50名であった。「級友関係（正）」と「級友関係（負）」およびこれらを含む交互作用は変数に投入しなかった。保健室に対して安堵感を抱いているほど（$\beta = .61, p < .001$）、また男子よりも女子の方が（$\beta = .23, p < .05$）、養護教諭に対してアタッチメント行動を取ることが示された。

中学生　分析対象者は76名であった。保健室に対して安堵感を抱いており（$\beta = .55, p < .001$）、教師との関係がポジティブであるほど（$\beta = .29, p < .01$）、養護教諭に対してアタッチメント行動を取ることが示された。また、小学生と同様、男子よりも女子の方が養護教諭に対してアタッチメント行動を取ることも示された（$\beta = .24, p < .05$）。

高校生　分析対象者は91名であった。「対教師関係」とこれを含む交互作用は変数に投入しなかった。分析の結果、保健室に対して安堵感（$\beta = .63, p < .001$）、親和性（$\beta = .17, p < .05$）を抱いているほど、またクラスメートとポジティブな関係を築くことができていないほど（$\beta = -.17, p < .05$）、養護教諭に対してアタッチメント行動を取ることが示された。「安堵感」と「級友関係（正）」の交互作用も有意（$\beta = -.18, p < .05$）であったため、Cohen & Cohen（1983）の方法に従って単純傾斜を求め、Figure 1に示した。単純傾斜の有意性の検定を行ったところ、安堵感が高い場合には級友関係（正）の単純傾斜が有意であり（p

Table 1. 各尺度の平均値（*M*），標準偏差（*SD*），信頼性係数（α）

	保健室イメージ (*range*: 1-4)						学級適応感 (*range*: 1-4)									アタッチメント (*range*: 1-5)		
	安堵感 (items: 11)			親和性 (items: 7)			対教師関係 (items: 4)			級友関係（正） (items: 3)			級友関係（負） (items: 3)			アタッチメント行動 (items: 4)		
	M	*SD*	α	*M*	*SD*	α	*M*	*SD*	α	*M*	*SD*	α	*M*	*SD*	α	*M*	*SD*	α
小学生	2.42	0.72	.91	1.78	0.58	.75	2.86	0.64	.60	3.27	0.71	.50	2.09	0.67	.36	2.37	1.12	.83
中学生	2.42	0.69	.89	1.98	0.54	.74	2.55	0.66	.60	3.28	0.79	.76	2.29	0.75	.62	2.16	0.96	.83
高校生	2.32	0.62	.93	3.03	0.46	.76	2.11	0.46	-.12	3.04	0.79	.63	2.90	0.68	.58	2.51	1.01	.89

Table 2. 各尺度の相関

	1			2			3			4			5		
	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生
1 安堵感															
2 親和性	-.55 ***	-.35 ***	.20 †												
3 対教師関係	.05	-.14	—	-.16	.22 *	—									
4 級友関係（正）	—	-.04	.10	—	-.01	-.03	—	.20 *	—						
5 級友関係（負）	—	.15	-.44 ***	—	-.09	.01	—	-.20 *	—	—	-.42 ***	.29 **			
6 アタッチメント行動	.69 ***	.51 ***	.69 ***	-.44 **	-.22 †	.29 **	.13	.14	—	—	-.02	-.11	—	.06	-.42 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$
小学生：$N = 50\text{-}63$，中学生：$N = 76\text{-}111$，高校生：$N = 91$
注：「—」は分析から除外した変数である。

Table 3. 養護教諭へのアタッチメント行動に影響を及ぼす要因

	小学生	中学生	高校生
性	.23 *	.24 *	
安堵感	.61 ***	.55 ***	.63 ***
親和性			.17 *
対教師関係		.29 **	—
級友関係（正）	—		-.17 *
級友関係（負）	—		
安堵感×対教師関係			—
安堵感×級友関係（正）	—		-.18 *
安堵感×級友関係（負）	—		
親和性×対教師関係			—
親和性×級友関係（正）	—		
親和性×級友関係（負）	—		
R^2	.53 ***	.37 ***	.55 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$
注：空欄は除去された変数，「—」は投入されなかった変数である。

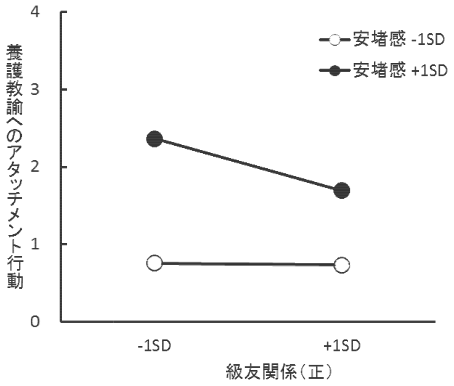

Figure 1：「安堵感」と「級友関係（正）」の交互作用（高校生）

< .01)、級友関係（正）が高い場合と低い場合のいずれにおいても安堵感の単純傾斜が有意であった（ps < .001）。

考察

本研究では児童生徒の保健室イメージと学級適応感が養護教諭に対するアタッチメント行動に与える影響について検討した。その結果、どの校種でも保健室に対して「安堵感」を抱いているほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなっていた。これに加えて、高校生では「親和性」が高いほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなっていた。以上のことから、「保健室に対してポジティブなイメージを持っている児童生徒は養護教諭に対してアタッチメント行動を取る」という仮説１は概ね支持されたと考えられる。一方、高校生ではクラスメートとポジティブな関係を築くことができていないほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなっていたが、小学生では学級適応感とアタッチメント行動に有意な関連は示されず、中学生では教師との関係がポジティブであるほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなるという結果となっていた。したがって、「学級適応が不良であるほど養護教諭に対してアタッチメント行動を取る」という仮説２は高校生では部分的に支持されたが、小学生・中学生では支持されなかった。以下、校種別に考察を進めていく。

小学生　学級適応感とは関係なく、保健室に対して「安堵感」を抱いているほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなっていた。小学生の主たる保健室来室理由はけがの手当て（32.0％）や体調不良（11.5％）であり（日本学校保健会、2013)、「保健室は安心できる場所だ」という信頼感が、「何かあったら養護教諭に頼る」という行動を支えていることが示唆された。安堵感が高いほど養護教諭へのアタッチメント行動も多いことから、児童の学校適応を保障するためには保健室が安心できる場所であり、養護教諭は安心を与えてくれる存在であると認知されることが肝要である。

児童の養護教諭へのアタッチメント行動と学級適応感の関連は示されなかったが、本研究ではクラスメートとの関係が養護教諭へのアタッチメント行動にどのように影響するのかについては検討することができなかった。また、主たる来室理由である体調不良の中には心身症やその可能性が否定できないものも含まれていると考えられることから、学級適応との関連については慎重に検討する必要がある。

中学生　小学生と同様、保健室に対して「安堵感」を抱いているほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなっていた。また、仮説に反して教師との関係が良好であるほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなっていた。

中学生の主たる保健室来室理由は小学生と同様、けがの手当て（14.0％）や体調不良（18.7％）であるが、身長や体重を測るため（6.8％）や何と

なく（10.4％）も多く（日本学校保健会、2013）、生徒たちが特別な理由もなく来室している様子が窺える。先生と話をしたいという理由も3.9％に上ることから（日本学校保健会、2013）、思春期を迎え、心身の悩みが増えてくる年代である中学生は「安心できる場所」である保健室で、心と身体の専門家である養護教諭と話をすることを通して、自身の悩みを解消していくことも多いのだろう。そして、特別な用件もなく保健室に来室し、養護教諭に話を聞いてもらう生徒にとっては、教師は全般的に信頼できる存在として認知されている可能性が示唆された。保健室及び養護教諭が「一時的な避難場所」として心身の不健康を改善するものとしてではなく、心身の健康の増進に貢献していることが推察される。

高校生　保健室に対して「安堵感」と「親和性」を抱いているほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなっていた。また、ポジティブな級友関係を作ることができていないほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多くなっていた。また、安堵感と級友関係（正）の間には交互作用も有意であり、ポジティブな級友関係を作ることができておらず、保健室に安堵感を抱いている場合に養護教諭へのアタッチメント行動が最も多くなっていた。

高校生の主たる保健室来室理由はけがの手当て（10.5％）や体調不良（23.8％）のほかに何となく（6.7％）、先生と話をしたい（3.8％）、休養したい（3.1％）となっていた（日本学校保健会、2013）。小中学生と大きく異なる点として保健室を休養のために活用している点が挙げられる。級友関係（正）の主効果、および安堵感と級友関係（正）の交互作用の結果も併せて考えると、保健室に対してポジティブなイメージを有している生徒が、クラスメートとポジティブな関係を作ることができなかったり、トラブル等により情緒的混乱に陥ったりしたときに、一時的に教室から離れるために保健室を利用している可能性が推察される。

高校生においては、学級適応感の中でもクラスメートとの関係については検討することができたが、教師との関係については検討することができなかった。中学生と同様に教師との関係が良好であるほど養護教諭に対するアタッチメント行動が多いのか、教師との関係をうまく作ることができない場合に保健室や養護教諭を「一時的な避難場所」として活用するのかについては改めて検討する必要がある。

本研究のまとめと今後の課題

小学校、中学校、高校を通して、保健室に対する安堵感が、養護教諭へのアタッチメント行動を最もよく予測していた。児童生徒に、保健室が、必要なときはいつでも利用可能であり、安心できる場所であると認知されることが必要である。その一方で、安堵感以外の要因が養護教諭へのアタッチメント行動に与える影響は校種によって異なっていた。児童生徒の発達段階に応じて養護教諭へのアタッチメント行動の規定因が異なるため、保健室や養護教諭はこうした児童生徒の変化に対応して、児童生徒を取り巻く教師や他の関係者と連携を取りながら柔軟にその役割を変化させていくことが、児童生徒の学校適応を保障する上では必要になってくると考えられる。

本研究の課題として次の２点が指摘できる。第一に、本研究では先行研究と同様の因子構造を仮定して分析を進めていったが、一部の因子については十分な信頼性が得られなかった。そのため、仮説に示した内容の一部は検討することができなかった。各校種独自の因子構造があるのか否かについての検討も含めて、信頼性の高い因子の再構成が必要であろう。第二に、本研究では小学校、中学校、高校各１校を対象に調査を実施したため、結果の一般化には限界がある。学校の風土や学校がある地域社会の実情に応じて、児童生徒の実態も異なることが考えられるため、他の地域・学校でも同様の調査を実施することで、それぞれの学校・校種の共通点と独自の課題を明らかにすることができると考えられる。

引用文献

Bowlby, J.(1969). Attachment and loss. Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books.

Cohen, J., & Cohen, P.(1983). Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences. 2nd ed. New

Jersey: Lawrence Erlbaum.
Fraley, R. C., & Davis, K. E.(1997). Attachment formation and transfer in young adults' close friendships and romantic relationships. Personal Relationships, 4, 131-144.
Hazan, C., & Zeifman,D.(1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartheolomew & D. Perlman(Eds.), Advances in personal relationships. Vol.5. Attachment processes in adulthood. London: Kingsley, pp.151-177.
Howes, C., Hamilton, C. E., & Philipsen, L. C.(1998). Stability and continuity of child-caregiver and child-peer relationships. Child Development, 69, 418-426.
小林正幸・仲田洋子(1997). 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響力に関する研究―学級の雰囲気に応じて教師はどうすればよいのか―　カウンセリング研究 , 30, 207-215.
小泉令三(1995). 小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的検討　福岡教育大学紀要第４分冊（教職科編）, 44, 295-303.
文部科学省(1997). 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について（保健体育審議会答申）
文部科学省(2008). 子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について（中央教育審議会答申）
文部科学省(2013). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
日本学校保健会(2013). 平成23年度調査結果　保健室利用状況に関する調査報告書
斎藤富由起・守谷賢二・社浦竜太・山内早苗(2008). 登校児童における学校適応度の割合と居場所の関連性　日本教育心理学会第50回総会発表論文集 , 443.
佐藤美保・井上　聡・小松代明子・浅川潔司(2013). 中学校生徒の保健室イメージの形成に関する発達心理学的研究　日本教育心理学会第55回総会発表論文集 , 251.
山口正寛(2009). 愛着機能尺度(Attachment-Function Scale)作成の試み　パーソナリティ研究 , 17, 157-167.

付記

本論文は、第二著者が鹿児島大学教育学部に提出した平成25年度卒業論文の一部を第一著者が再分析・再構成したものである。調査にご協力いただいた児童生徒の皆さまと小・中・高等学校の先生方に感謝申し上げます。